

# ウルトラマンの言語学

秋 月 高 太 郎\*

The Language of ULTRAMANS

Kotaro Akizuki

ウルトラマンはどのようなことばを話すのか。ウルトラマンが話すことばにはどのような特徴があるのか。このような問いについて、役割語の視点から明らかにする。ウルトラマンのことばは〈神様〉キャラクターの役割語である。〈神様〉キャラクターの役割語には、〈標準語〉である、常体（ダ・デアル体）である、自称詞は「わたし」、対称詞は「きみ」「おまえ」を用いる、平坦調イントネーションを用いるといった特徴がある。

キーワード： 役割語、発話キャラクター、標準語、スタイル

## 1. はじめに

ある言語の話し手が、同じ内容のものやことを表すのに、異なった形式を用いることがある。たとえば、ある男子大学生が、自分のことを、友人宅で仲のいい友人と話しているときは「オレ」と言い、就職の面接では「ワタシ」と言うというケースを考えてみよう。社会言語学では、このような、話し手が場面や相手によってことばを使い分ける現象を、「スタイル・シフト (style shifting)」と呼ぶ。この男子大学生は、インフォーマルな（くだけた）場面では「オレ」を、フォーマルな（形式ばった）場面では「ワタシ」を用いるという自称詞の使い分けを行っている。つまり、話し手は、場面や相手によって、それにふさわしい（とみなした）スタイルの選択を行うのである。このような考え方を「スタイル説」と呼ぼう<sup>1)</sup>。

しかし、ことばの使い方すべてを、スタイル説で説明できるわけではない。たとえば、ある女子大学生が、自分のことを「ボク」と称するというケースを考えてみよう。今日、若い女性が「ボク」ということばを用いて自分を称することは決して珍しくない。彼女らは「ボクっ子」<sup>2)</sup>と呼ばれることがあるが、筆者が勤務する大学にも一定数存在する<sup>3)</sup>。スタイル説に基づけば、「ボク」は、男性というジェンダー属性をもつ話し手によって用いられる自称詞である。なぜ「ボクっ子」は、女性であるにもかかわらず、「ボク」という自称詞を用いるのか。また、なぜ彼女たちは「オレ」ではなく「ボク」という自称詞を使うのか。スタイル説では、このような問いに十分な答えを与えることはできない。

これに対して、金水（2003）は「役割語」という概念を導入した。金水（2003）によれば、役割語とは以下のように定義される。

---

2012年4月5日受理  
\* 尚綱学院大学 教授

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されるとその人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

さらに、定延（2006）はこれを発展させ、役割語の使用によって繰り出される人物像を「発話キャラクタ」と名づけた。このような考え方を「役割語説」と呼ぼう。役割語説は、「ボクっ子」の言葉づかいに、次のような説明を与えることが可能である。「ボクっ子」の「ボク」は〈男装女子〉キャラクタの役割語であり、「ボクっ子」の女子大学生は、「ボク」という自称詞を使うことによって、〈男装女子〉という発話キャラクタを繰り出しているのである。手塚治虫の『リボンの騎士』におけるサファイア姫以来、女の子でありながら女の子として生きることを拒否する、または拒否せざるを得ない、いわゆる〈男装女子〉キャラクタは、特に少女向けのメディアにおいて繰り返し描かれてきている<sup>4)</sup>。発話キャラクタがイメージに基づいている限りにおいて、「ボクっ子」が、そのような〈男装女子〉キャラクタのイメージに基づいているであろうことは疑いがない。定延（2011）によれば、スタイルは、話し手が相手や場面によって自由に変えてよいものであるのに対し、発話キャラクタは「変わらないことが期待されているもの」である。「ボクっ子」の女子大学生が「ボク」という自称詞を使い続けるのは、それによってイメージされる人物像を保持したいためであり、逆に言えば、「ワタシ」や「アタシ」を使うことによって繰り出されてしまう人物像を拒否したいためであると考えられる<sup>5)</sup>。

以上で見たように、役割語説は、スタイル説では説明できないことばの使い方を説明する。役割語説はスタイル説を補完するのである。金水（2003）以降、定延（2006）、金水（2007）、定延（2011）、金水（2011）、田中（2011）等、役割語説に基づいた、ことばの使い方に関する研究が進みつつある。本稿もそういった研究の一端であることを意図している。本稿の目的は、役割語説に基づいて、ウルトラマンのことは考察することである。1960年代にテレビに登場したウルトラマンが日本を代表するヒーローであることは言うまでもない。これまで、ウルトラマンの作品論や、その制作に関わった人々に関する作家論は数多くなされてきた。また、1990年代前半には、ウルトラマンの作品世界内の（架空の）事柄に対する「科学的」な考察も行われたこともある<sup>6)</sup>。しかし、ウルトラマンのことはについての研究は、筆者の知る限り存在しない。ウルトラマンはどのように話すのか。そして、その話し方にはどのような特徴があるのか。役割語説は、このようなウルトラマンのことはに関する問いに答えることが可能である。

以下、第2章では、本稿で対象とするウルトラマンのことはとはどのようなものであるかについて述べる。第3章では、金水（2003）で示された、ヒーローの役割語＝〈標準語〉説を紹介する。第4章では、その説を手がかりに、ウルトラマンのことはは〈神様〉キャラクタの役割語であることを述べる。第5章では、〈神様〉キャラクタの役割語の言語学的特徴について述べる。第6章では、ウルトラマンのことはと〈神様〉キャラクタの役割語の関係における揺らぎについて述べる。

## 2. ウルトラマンのことは

具体的な考察に入る前に、本稿で対象とするウルトラマンのことはとはどのようなものを指

すのかを明らかにしておこう。ウルトラマンのことばと言うと、「シュワッチ」や「ジュワ」のようなものを思い浮かべるかもしれない。しかし、本稿で対象とするのは、そのような「かけ声」ではなく、ウルトラマンが話す日本語である。さらにもう1つ注意すべきことがある。設定上、ウルトラマンは、地球上で、ウルトラマンの姿で活動する時間が限られている（3分間など）。そのため、ウルトラマンは、日常は、地球人に乗りうつったり、地球人の姿に変身したりして、地球人と同じ姿で活動している。実際、物語中では、ウルトラマンはハヤタ隊員として、ウルトラセブンはモロボシ・ダンとして活動することがほとんどである。しかし、本稿では、ハヤタ隊員やモロボシ・ダンの発話は、考察の対象としない。本稿で対象とするのは、ウルトラマンやウルトラセブンが、本来の姿（宇宙人）のときに発話する日本語のみである。このように限定すると、ウルトラマンのことばはきわめて少なくなる。『ウルトラマン』において、そのようなウルトラマンのことばが現れるのは、第1話と第39話（最終話）である<sup>7) 8)</sup>。例として、第1話における、ウルトラマンと（ウルトラマンに乗りうつられる前の）ハヤタ隊員の会話を示そう<sup>9)</sup>。

(1) 【ウルトラマン（初代マン）とハヤタ隊員の会話】

ハヤタ： おい、だれだ、そこにいるのは。君はいったい何者だ。

ウルトラマン： M78 星雲の宇宙人だ。

ハヤタ： M78 星雲の宇宙人？

ウルトラマン： そうだ。遠い宇宙からバムラーを宇宙の墓場に運ぶ途中、バムラーに逃げ出されて、それを追って地球に来た。

ハヤタ： バムラー？

ウルトラマン： 宇宙の平和を乱す悪魔のような怪獣だ。申し訳ないことをした。ハヤタ隊員、その代わりわたしの命を君にあげよう。

ハヤタ： 君の命を？ 君はどうなる。

ウルトラマン： 君と一心同体になるのだ。そして地球の平和のために働きたい。

ハヤタ： これは何だ。

ウルトラマン： ベータカプセル。

ハヤタ： ベータカプセル？

ウルトラマン： 困ったときに、これを使うのだ。そうすると

ハヤタ： そうするとどうなる。

ウルトラマン： フッフッフッ 心配することはない。

(『ウルトラマン』第1話 ウルトラ作戦第一号)

(1) における下線部分が、ウルトラマンが、ウルトラマン（M78 星雲人）の姿で発話している部分である。ウルトラマンの発話データは以下の6作品から採取した<sup>10)</sup>。

『ウルトラマン』 1966年7月17日～1967年4月9日放送 全39話

『ウルトラセブン』 1967年10月1日～1968年9月8日放送 全49話

『帰ってきたウルトラマン』 1971年4月2日～1972年3月31日放送 全51話

『ウルトラマンA（エース）』 1972年4月7日～1973年3月30日放送 全52話

『ウルトラマンタロウ』 1973年4月6日～1974年4月5日放送 全53話  
 『ウルトラマンレオ』 1974年4月12日～1975年3月28日放送 全51話

なお、本稿では、M78星雲人の総称として「ウルトラマン」という呼称を用いる。ただし、個別のM78星雲人に言及する場合は、「ゾフィー」「初代マン」「セブン」「新マン」「エース」「タロウ」「レオ」などの略称を用いる。

### 3. ヒーローの役割語

本章では、ウルトラマンの言葉づかいについて考察する手がかりとして、金水（2003）で提示された、ヒーローの役割語＝〈標準語〉説について述べる。ここで言う「ヒーロー」とは、物語における主役のキャラクターを指す。主役のキャラクターとは、その物語の読み手（視聴者）が自己同一化する人物である。一方、主役以外のキャラクターはすべて脇役であり、読み手が自己同一化する対象ではない。

金水（2003）は、ヒーローが〈標準語〉を話すの対し、脇役は非〈標準語〉を話すことが多いと言う。例として、『パーマン』という作品をみてみよう<sup>11)</sup>。『パーマン』における中心的なキャラクターは、パーマン1号、2号、3号、4号の4人である。この物語におけるヒーロー（主役）は、パーマン1号である須和みつ夫である。動物園のチンパンジーである2号、アイドル歌手の女の子である3号、大阪の男の子である4号は脇役である。『パーマン』において、ヒーローである1号は〈標準語〉で話すのに対し、脇役である4号は〈関西弁〉で話す。

金水（2003）は次のように述べている。

読み手・聞き手が自分を同一化する〈ヒーロー〉は、どのような言葉を話すのか。それは、典型的には〈標準語〉である。むろん、例外もいくらでも見つかるが、その場合は十分な背景の説明と人物描写を重ねることでそれが可能になるのであり、そうでなければ非〈標準語〉話者に我々は容易に自己同一化をすることができない。逆に、〈標準語〉話者ならば、我々は無条件に自己同一化をする準備ができています。

なぜ、読み手は、〈標準語〉話者に、容易に自己同一化できるのか。金水（2003）はそれを、近代日本における〈標準語〉の成立過程に求める。〈標準語〉とは、明治政府によってつくられた「人工的な」ことばである。〈標準語〉成立の背景を、真田（1991）は、次のように述べている。

時の政府の急務は、中央集権国家として、政治的・社会的に全国的な統一をはかることにあった。それは、分割された各藩の領地の内部でしか生活が許されていなかった領民を、そういう生活から解放し、士農工商という階層に分割されていた人々を、いわゆる四民平等の理念のもとに、一つの国民として、一つの国家のもとにおさめる、いわばそのような国家づくりだったと総括できよう。

そのプロセスは、当然のこととして人々の意識の根幹であることばの統一、標準化が求められたのである。また、開国に伴って、対外的にも近代国家としての正式な国語を確立しておく必要にせまられたのである。

当時、「正式な国語」のモデルとして選ばれたのは、東京の言葉である。すべての日本国民は、東京の言葉に近い〈標準語〉を理解し、話すことができることが目指されたのである。〈標準語〉が広く日本国民に受容される過程においては、近代以降整備され、発達した学校教育や新聞、雑誌などのマスメディアが効果的に働いた。その中でも特に、金水(2003)は、「東京を舞台にし、東京の言葉話す人物が登場する小説」の存在に注目し、次のように述べている<sup>12)</sup>。

東京で作られた東京の小説を、全国の読み手が読むことによって、東京の言葉話す人物に自己同一化する訓練が全国規模で行われたわけである。同様のことはあらゆるメディアを通じて遂行され、その結果として、〈東京語〉＝〈標準語〉＝〈ヒーロー語〉という図式が完成したのである。

〈東京語〉の話し手はもとより、〈関西弁〉や〈東北弁〉の話し手も、このような小説を読むことで、〈東京語〉＝〈標準語〉＝〈ヒーロー語〉という図式をつくりあげていったであろうことは疑いない。こうして、日本で育った日本語話者は、〈標準語〉を話すヒーローを違和感なく受け入れ、彼(女)に自己同一化するようになったのである<sup>13)</sup>。

#### 4. 〈標準語〉で話すウルトラマン

本章では、ヒーローの役割語＝〈標準語〉説を手がかりに、ウルトラマンのことばについて考えていこう。(1)の初代マンとハヤタの会話からもわかるように、ウルトラマンは〈標準語〉を話す。初代マンに限らず、すべてのウルトラマンは〈標準語〉で話す。今日まで、〈関西弁〉や〈東北弁〉等の方言で話すウルトラマンが登場したことはない。この事実は、金水(2003)のヒーローの役割語＝〈標準語〉説を裏づけるものと言えそうだ。すなわち、ウルトラマンが〈標準語〉で話すのは、彼がヒーローであるからと考えられる。

しかし、ここで1つ疑問が生じる。第3章で述べたように、ヒーローが〈標準語〉を話すのは、読み手や視聴者が、〈標準語〉を話すヒーローを違和感なく受け入れ、彼(女)に自己同一化することができるからであった。だが、『ウルトラマン』の視聴者が自己同一化するのはウルトラマンだろうか。ウルトラマンは、その姿も大きさも、地球人とは異なっている。そのような生命体に、地球人の視聴者は自己同一化できるだろうか。むしろ、『ウルトラマン』の視聴者が自己同一化するのは、ウルトラマンではなく、(地球人の姿の)ハヤタ隊員であると思われる。もちろん、『ウルトラマン』という物語の大半において、ハヤタ隊員＝ウルトラマンなのだが、この物語におけるヒーローは、ウルトラマンではなく、ハヤタ隊員であろう。これは、『ウルトラセブン』におけるヒーローが、ウルトラセブンではなく、彼が地球人の姿に変身したモロボシ・ダンであるのも同様である。

このように考えると、ウルトラマンが〈標準語〉で話すのは、彼がヒーローだからとは言えないことになる。では、なぜウルトラマンは〈標準語〉で話すのだろうか。ここで参照したいのが、ウルトラマンの設定である。ウルトラマンは、地球から何万光年も離れたM78星雲「光の国」からやってきた宇宙人である。「光の国」は、地球よりもはるかに文明や科学が進歩した「国」であり、その住人であるウルトラマンは、地球人にはない超能力をもっている。これにより、ウルトラマンには、地球人には不可能な、怪獣退治や凶悪宇宙人の侵略撃退が可能なのである。

つまり、地球人にとって、ウルトラマンは未知の存在であり、「神」に等しい。ここで、次のような仮説をたててみよう。

ウルトラマン = 〈神様〉仮説： ウルトラマンは〈神様〉キャラクターの役割語で話す。

〈神様〉はなぜ〈標準語〉で話すのか。逆に、〈神様〉はなぜ〈関西弁〉や〈東北弁〉で話さないのか。これには、〈標準語〉の「値段」というものが関係していると考えられる。井上(2000)は「ことばの値段」という概念を導入した。言語や方言には、価値があるものとないものがある。近代以降の日本語において、〈標準語〉は絶対的な価値を与えられている。他のいかなる方言もそれに比肩することはできない。第2章でも述べたように、〈標準語〉への価値付与は、明治政府によって政治的に行われた。それは、方言の低価値化と表裏一体であった。戦後、方言の復権（価値上昇）があったものの、今日でも〈標準語〉の絶対的な価値は揺るいでいない<sup>14)</sup>。

すなわち、絶対的な価値をもつ〈標準語〉だけが〈神様〉のことばにふさわしい。だから〈神様〉は〈標準語〉で話すのである。ウルトラマンは、〈標準語〉で話すことによって〈神様〉キャラクターを繰り出しているのである<sup>15) 16)</sup>。

## 5. 〈神様〉キャラクターの役割語

第4章で、ウルトラマンのことばは〈神様〉キャラクターの役割語であると考えた。〈標準語〉で話すことは、〈神様〉キャラクターの役割語の特徴の1つである。本章では、ウルトラマンのことばが〈神様〉キャラクターの役割語として、他にどのような言語学的特徴をもっているか見てみよう。

### 5.1 〈神様〉キャラクターの自称詞・対称詞

(1) からわかるように、初代マンは自分のことを「わたし」と称する。これはほぼすべてのウルトラマンに共通する。いくつか他の例も示そう。

#### (2) 【ゾフィーがゼットンに倒された初代マンに話しかけるシーン】

ゾフィー： ウルトラマン、目を開け。わたしは M78 星雲の宇宙警備隊ゾフィー。  
(『ウルトラマン』第 39 話 さらばウルトラマン)

#### (3) 【新マンが命を落とした郷秀樹に語りかけるシーン】

新マン： 郷秀樹。わたしは君の勇敢な行動を見た。  
(『帰ってきたウルトラマン』第 1 話 怪獣総進撃)

#### (4) 【エースが北斗星司と南夕子に名乗るシーン】

エース： わたしはウルトラ兄弟の 5 番目、ウルトラマンエースだ。  
(『ウルトラマン A』第 1 話 輝け！ウルトラ五兄弟)

ウルトラマンが自分を称するときのことばは「わたし」でなければならない。「わたし」は〈神様〉キャラクターを繰り出すのにふさわしい自称詞である。逆に言えば、「ボク」や「オレ」は、〈神

様)の自称詞にはふさわしくない。「ボク」にはへりくだったイメージが、「オレ」にはいばったイメージが、それぞれつきまとうからだ。〈神様〉の品格を保つためには、「わたし」だけが、〈神様〉にとって可能な自称詞だと言える。

次に、ウルトラマンが用いる対称詞を見てみよう。まず、聞き手が地球人の場合は、(1)、(3)からわかるように、初代マンと新マンは「君」を用いている。また、以下の(5)では、エースは「おまえ(たち)」を用いている。

(5) 【エースが北斗星司と南夕子にウルトラリングを与えるシーン】

エース： 銀河連邦の一員たるを示すウルトラリングを今おまえたちに与えた。そのリングの光るとき、おまえたちはわたしの与えた大いなる力を知るだろう。

(『ウルトラマンA』第1話 輝け！ウルトラ五兄弟)

ウルトラマンが地球人を呼ぶのにふさわしいことばは「君」か「おまえ」である。スタイル説にしたがえば、「君」や「おまえ」は、話し手が聞き手よりも上位であるときに用いられる対称詞である。役割語説の枠組から言えば、「君」や「おまえ」は〈神様〉キャラクタを繰り出すのにふさわしい対称詞である。逆に、「あなた」のような対称詞は〈神様〉キャラクタを繰り出すのにふさわしい対称詞ではない<sup>17)</sup>。

一方、ウルトラマン同士の会話においては、必ずしも「君」や「おまえ」が用いられるわけではない。

(6) 【ゼットンに倒された初代マンがゾフィーと話しているシーン】

初代マン： ゾフィー、わたしの体はわたしだけのものではない。わたしが帰ったら一人の地球人が死んでしまう。

(『ウルトラマン』第39話 さらばウルトラマン)

(7) 【セブン上司が(夢の中で)モロボシ・ダン(セブン)に忠告するシーン】

セブン上司： セブン、今は自分のことを考えるときだ。地球にとどまることは死を意味するのだ。

(『ウルトラセブン』第48話 史上最大の侵略(前編))

(8) 【ウルトラ5兄弟がゴルゴダの星に集められるシーン】

初代マン： エース、いったいどうしたのだ。

(『ウルトラマンA』第13話 死刑！ウルトラ5兄弟)

上の(6)～(8)から、ウルトラマンが他のウルトラマンを呼ぶときは、相手の名前を用いていることがわかる。スタイル説にしたがえば、対称詞として相手の名前を用いるのは、より親しい相手に対してである。〈神様〉が対称詞として相手の名前を用いることができるのは、相手と同じ〈神様〉の場合に限られる。一方、〈神様〉は〈人間〉に対して、名前で呼びかけることは控えなくてはならない。もし〈神様〉が〈人間〉を〈人間〉の名前で呼びかけてしまえば、〈神様〉の品格は崩壊してしまう危険性がある。

## 5.2 〈神様〉キャラクターの文体

今までの(1)～(8)からわかるように、ウルトラマンは常体(ダ・デアル体)で話す。ウルトラマンは丁寧体(デス・マス体)で話さない。これは、地球人に体するときも、ウルトラマン同士の会話でも同様である。ウルトラマン同士の会話において、ウルトラマンが常体で話すことは、スタイル説でも説明可能だ。ウルトラマン同士の会話とは仲間同士の会話であり、そのような場においては、ぞんざいな文体である常体が選択されるからだ。一方、ウルトラマンが地球人との会話において常体で話すのは、〈神様〉キャラクターを繰り出すためだと考えられる。超越的な存在である〈神様〉は、聞き手に対して、ぞんざいに話すことで、その品格を保てるからだ。

## 5.3 〈神様〉キャラクターの対人的モード

文構造の研究において、文は、「命題」と呼ばれる、客観的な事態を表す部分と、「モード」と呼ばれる、話し手の主観的な態度を表す部分から構成されていると考えられている。モードはさらに、事態に対する心的態度を表す「対事的モード」と、聞き手に対する話し手の心的態度を表す「対人的モード」に分けられる。野田(1997)によれば、対人的モードには以下のよなものがある。

- ①聞き手に情報をどう伝えるかどうかについての心的態度を表す形式
  - 主張 「よ」
  - 確認 「ね」
- ②聞き手に情報の提供を促す心的態度を表す形式
  - 質問 上昇イントネーション
- ③聞き手に行為の実行を促すかどうかについての心的態度を表す形式
  - 命令 命令形、「なさい」「な(禁止)」
  - 依頼 「てくれ」「てください」
  - 勧誘 「(よ)う」

以上の3つの対人モードを表す形式のうち、ウルトラマンは、③を用いることはあるが、①や②を用いることはない。③を用いている例をいくつか示そう。

### (9) 【ゼットンに倒された初代マンがゾフィーと話しているシーン】

ゾフィー： 地球の平和は人間の手でつかみ取ることに価値がある。ウルトラマン、いつまでも地球にはいかん。

(『ウルトラマン』第39話 さらばウルトラマン)

### (10) 【セブン上司が(夢の中で)モロボシ・ダン(セブン)に忠告するシーン】

セブン上司： 1つだけ忠告する。戦ってこれ以上エネルギーを消耗してはならん。M78星雲に帰ることもできなくなってしまう。変身してはいかん。

(『ウルトラセブン』第48話 史上最大の侵略(前編))

(11) 【初代マンがハヤタ隊員に話しかけるシーン】

ウルトラマン： 宇宙の平和を乱す悪魔のような怪獣だ。申し訳ないことをした。  
ハヤタ隊員、その代わり私の命を君にあげよう。

(『ウルトラマン』第1話 ウルトラ作戦第一号)

(9)、(10) は「命令」、(11) は「勧誘」の対人的ムードを表す形式が用いられている。なぜ、ウルトラマンは「主張」「確認」「質問」のような対人的ムードを表す形式を用いることがないのだろうか。それは、そのような対人的ムードが〈神様〉キャラクタに合致しないからだと考えられる。話し手が「主張」「確認」「質問」を行う前提には、話し手による聞き手との情報共有への指向がある。話し手は、聞き手と自分がもっている情報を共有したいために「主張」し、聞き手と自分が共有している（と想定される）情報の確度を上げるために「確認」し、聞き手だけがもっている（と想定する）情報を共有したいために「質問」するのである。〈神様〉は、このような情報共有の指向をもたない。超越的な存在である〈神様〉にとって、あらゆる情報は既知のものであるからだ。〈神様〉に知らないことはないのである。ゆえに、〈神様〉が「主張」「確認」「質問」を行うことは、〈神様〉が無知であることをさらけ出すことになり、〈神様〉キャラクタが崩壊してしまうのである<sup>18)</sup>。

#### 5.4 〈神様〉キャラクタの声

ウルトラマンの発話は、それが音声コミュニケーションである限りにおいて、音声の点においてもいくつかの特徴がある。

第1は、イントネーション上の特徴である。イントネーションとは、ピッチ（音の高さ）の変化のことであり、人間の発話は、ふつう、ピッチの変化を伴って発せられる。逆に言うなら、ピッチの変化なしに発話することは困難である。イントネーションには、いくつかの異なった機能があることが知られているが<sup>19)</sup>、ここではイントネーションとスタイルの関係に注目してみよう。渡辺（1994）は、イントネーションの機能として「スタイル機能」というものをあげている。イントネーションのスタイル機能とは「発話の種類がどのような言語使用域のものであるかを示すもの」である。渡辺（1994）は、スタイル機能を示す例の1つとして、キリスト教会における祈りをあげ、祈りには「音調的には平坦調が非常に好んで用いられ、かつ使用のピッチの幅が狭いため、変化の少ない、同じリズムを繰り返す単純な調子」という特徴があると述べている。渡辺（1994）があげているのは英語の例であるが、特定に場面において、その場面特有のイントネーションの特徴が存在するというのは、言語に普遍的な現象であると考えられる。これを手がかりにして、ウルトラマンの発話を見てみよう。ウルトラマンの発話におけるイントネーション上の特徴として、その多くにおいて、ピッチの変化が小さいこと、いわゆる平坦調で発話されていることがあげられる<sup>20)</sup>。奇しくもこれは、渡辺（1994）における祈りの場面の発話と共通した特徴である。ウルトラマンのこぼが〈神様〉キャラクタの役割語である限りにおいて、それが祈りのことばと共通する特徴をもつことはさほど驚くべきことではない。いわば〈神様〉との対話の場において、〈神様〉も人間も、同じような音声的特徴（ここでは平坦調）で発話を行うことは、その場の「荘厳さ」を維持することに貢献するからである。

ウルトラマンの発話における音声上の特徴の2つ目として、残響音（リバーブ）を伴うことがあげられる。もちろん、人間の音声器官には、意図的に残響音を生じさせるようなくみは

備わっていない。したがって、人間の音声に残響音が伴って聞こえることがあるとすれば、それは、音声器官によって生じさせられているのではなく、発話する場における環境的な条件によって生じていると考えなくてはならない。たとえば、トンネルや天井の高い礼拝堂の中で発話すれば、その声に残響音が伴って聞こえる可能性が高い。ただ、ウルトラマンの声に残響音が伴っていることが、ウルトラマン自身の身体的構造に基づくものなのか、それとも、発話の場の環境的条件に基づくものなのかを明らかにすることは、本稿の目的ではない<sup>21)</sup>。したがってここでは、ウルトラマンの声に残響音が伴っているという事実のみを問題にする。ウルトラマンの声に残響音が伴っているのは、それが〈神様〉キャラクタを繰り出すのに貢献するからだと言える。〈神様〉の声は、天空から地上の人間に降り注がれるようなイメージで描かれることが少なくない。そのような〈神様〉の声は、人間には残響音を伴って聞こえるにちがいない。ウルトラマンが地球人に話しかけるときの、同様のイメージで描かれている（図1、2参照）。ウルトラマンの声に残響音が伴っていることは、それが〈神様〉キャラクタの声であることを示している。

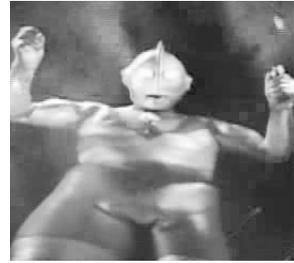


図1. 初代マンがハヤタに話しかけるシーン  
（『ウルトラマン』第1話）



図2. 新マンが郷秀樹に話しかけるシーン  
（『帰ってきたウルトラマン』第1話）

## 6. ウルトラマンと〈神様〉キャラクタ

ウルトラマンのことは〈神様〉キャラクタの役割語であることを見てきた。ここで、〈神様〉キャラクタの役割語の特徴をまとめておこう。

- ①〈標準語〉である。
- ②自称詞は「わたし」、対称詞は「君」「おまえ」を用いる。
- ③常体（ダ・デアル体）である。
- ④对人的ムードを表す形式のうち、聞き手に情報をどう伝えるかどうかについての心的態度を表す形式と、聞き手に情報の提供を促す心的態度を表す形式を用いることができない。
- ⑤平坦調のイントネーションを用いる。
- ⑥残響音を伴う。

以上のような特徴をもった発話を行うことで、ウルトラマンは〈神様〉キャラクタを繰り出す。しかし、ウルトラマンはすべての発話において、このような〈神様〉キャラクタの役割語で話しているわけではない。ウルトラマンは、しばしば、〈神様〉キャラクタの役割語から逸脱した言葉づかいをすることがある。実は、ウルトラマンは、地球人と話すときはほぼ〈神様〉キャラクタの役割語で話しているが、他のウルトラマンと話すときは、〈神様〉キャラクタの役割語から逸脱することがあるのである。たとえば、以下の例を見られたい。

(12) 【ゼットンに倒された初代マンがゾフィーと話しているシーン】

ゾフィー： じゃあ、ハヤタと君の体を分離するぞ。

(『ウルトラマン』第39話 さらばウルトラマン)

(13) 【ウルトラ5兄弟がゴルゴダの星に集められるシーン】

エース： これはボクの十字架だ。

ゾフィー： オレもある。

セブン： オレもある。

新マン： オレもある。

(『ウルトラマンA』第13話 死刑！ウルトラ5兄弟)

(12) のゾフィーの発話では、終助詞の「ぞ」が用いられている。終助詞「ぞ」は、聞き手に情報をどう伝えるかどうかについての心的態度を表す対人的ムードを表す形式であり、〈神様キャラクター〉の役割語の特徴④から逸脱している。また、(13) では、自称詞として、エースが「ボク」を、ゾフィー、セブン、新マンが「オレ」を用いており、〈神様キャラクター〉の役割語の特徴②から逸脱している。

これらの例について、ウルトラマンは、他のウルトラマン（仲間）と話すときは、〈神様〉キャラクターの役割語から逸脱した言葉づかいをすることがあるという、スタイル説に基づいた説明も可能であろう。しかしここでは、役割語説に基づいた説明を試みてみよう。実は、ウルトラマンが、〈神様〉キャラクターの役割語から逸脱した言葉づかいをするようになるのは、『ウルトラマンA』以降の作品においてである<sup>22)</sup>。この作品で明確に打ち出されたのが、ウルトラ兄弟という概念である。ウルトラ兄弟は、人間世界で言うところの、いわゆる義兄弟であり、そのあり方はきわめて人間（地球人）的である。たとえば、「弟」のウルトラマンがピンチに陥ると、「兄」のウルトラマンが助けに現われるといった具合である。ここにおいて、ウルトラマンは〈神様〉キャラクターを降りてしまったと言うことができよう。それは、「末っ子」のエースが自分のことを「ボク」と言い、「兄」のウルトラマンたちが自分のことを「オレ」と言うことに現れている<sup>23)</sup>。『ウルトラマンA』以降のウルトラマンは、もはや〈神様〉ではないのである<sup>24)</sup>。したがって、〈神様〉の役割語を用いて、〈神様〉キャラクターを繰り出さなくてもいいというわけである。

## 7. おわりに

本稿では、ウルトラマンのことばについて述べてきた。役割語という考え方を使うことで、ウルトラマンはどのように話し、その話し方にはどのような特徴があるのかという問いに対してある程度の解答を与えることができたと思う。それは、ウルトラマンのことは〈神様〉キャラクターの役割語であり、その〈神様〉キャラクターの役割語はいくつかの言語学的特徴によって性格づけられているということである。

ウルトラマンのことは明らかにする過程で、新たな疑問もいくつか浮上した。ウルトラマン以外のヒーローはどのようなことばで話すのか。〈神様〉の役割語で話すキャラクターには、ウルトラマン以外にどのようなキャラクターがいるのか。ウルトラマン以外の宇宙人はどのようなことばで話すのか。いずれも興味深い問題であるが、これら問いに答えるのは、別の機会に譲ることにしよう。

## 注)

- 1) Trudgill (2003)によれば、styleとは、以下のように定義される。  
In sociolinguistics, a variety of language which is associated with social context and which differs from other styles in terms of their formality.  
さらに、style shiftingは以下のように定義される。  
Changing from one style to another - or, better, moving along the continuum of style - as the formality of a situation changes, or in order to change the formality of a situation, is known as style shifting.
- 2) Wikipediaによれば、「ボクっ子」以外にも、「ボクっ娘(こ)」「ボク少女」「僕女(はくおんな)」などの名称がある(2012年3月11日閲覧)。
- 3) 国立国語研究所(1996)では、1989年から1992年にかけて、東京都、大阪府、山形県の中学校・高等学校57校の生徒6021人に、学校社会における敬語意識や敬語行動の調査を行っている。その中に、学校で用いる自称詞の調査がある。それによると、「東京・女子」が「ボク」を用いる割合は、「対同性友人」では中学生2.8%、高校生1.7%、「対担任」では中学生0.7%、高校生0.8%である。また、本田(2011)における、2009年10月下旬から2010年1月中旬にかけて、神奈川県公立中学校23校の2年生2874名に行われた調査では、女子の「ボク」の使用率は1.2%である。
- 4) 同様の例として池田理代子の『ベルサイユのばら』におけるオスカルや、宝塚の男役をあげることができよう。ただし、ここで言う〈男装女子〉とは、必ずしも、男性が身につけるような服装をしている女子といった、いわゆる「男装コスプレ女子」だけを指しているわけではない。服装においては、スカートを履くことよりパンツ姿を好むといった程度の嗜好で十分である。本田(2011)によれば、「ボクっ子」のような、男性型の自称詞を用いる女子には、「クラス内の『地位』がやや低め」「『キャラを演じる』度合いやアイデンティティの揺らぎは比較的強い」という傾向が見られるという。
- 5) 「ワタシ」や「アタシ」を使うことによって繰り出されてしまう人物像とは、いわゆる〈女の子〉の発話キャラクターである。
- 6) 『ウルトラマン研究序説』『ウルトラマン新研究 - その「戦争と平和」論概説』『ウルトラマン解体新書』などがある。
- 7) 第1話と最終話は、ウルトラマンが地球人と接触し、コミュニケーションを行う場面が描かれる回だと言える。第1話はウルトラマンと地球人のファースト・コンタクトの場面が描かれる回であり、最終回はウルトラマンが地球人に別れを告げ、地球から去る場面が描かれる回である。
- 8) 他にも、『ウルトラマン』では、第15話「恐怖の宇宙線」において、空の星の姿のウルトラマンが、地上の子どもたちに話しかけるシーンがあるが、これは、本稿で言うウルトラマンの発話とはみなさない。
- 9) 例の文中において、「。」は下降イントネーション、「?」は上昇イントネーションで発話されていることを示す。
- 10) 本稿で対象にするのは、いわゆる第1期・第2期ウルトラシリーズ作品群(昭和ウルトラシリーズ)であり、いわゆる平成ウルトラシリーズの作品は対象としない。
- 11) 『パーマン』は藤子・F・不二雄のマンガ作品、またはそれを原作としたアニメ作品である。マンガは、1996年より小学館の学年別学習雑誌等で連載され、アニメはテレビシリーズとして、1967年に1作目が、1985年に2作目が製作・放映された。
- 12) たとえば、『当世書生気質』『浮雲』『たけくらべ』『金色夜叉』『不如帰』『婦系図』等をあげることができる。
- 13) 例外として、NHKの大河ドラマに登場する坂本龍馬のような、方言で話すヒーローを思い浮かべるかもしれない。しかし、田中(2011)が示しているように、坂本龍馬が土佐弁を話すキャラクターとして登場するのは、高度経済成長期に執筆された、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』であり、それ以前の坂本龍馬は〈標準語〉を話すキャラクターとして造形されていた。また、今日では、方言を話すヒーローとして、いわゆる「ご当地ヒーロー」の存在をあげることができるかもしれない。しかし、このような例も、金水(2003)の言う「十分な背景の説明と人物描写を重ねることで」方言を話すヒーローとしての位置が確立されている例であり、〈標準語〉を話さなくても驚くにはあたらなない。
- 14) 第3章でも述べたように、明治時代には、方言は撲滅の対象であった。しかし、戦後には、方言復権の態度が生まれ、方言を記述・保存しようという運動がさかんになり、今日では、方言で話すタレントやヒーローが登場するようになった。これを方言の価値上昇とみることができよう。ただ、方言の価値上昇によって、〈標準語〉の価値が相対的に下降したわけではないことに注意されたい。〈標準語〉の価値は維持されたまま、方言の価値が上昇したのである。

- 15) ここで言う〈神様〉は、特定の宗教における「神」を指しているのではない。本稿における〈神様〉とは発話キャラクターの一種である。それは、人々の畏怖や敬愛の対象であり、超自然的な力（超能力）をもつキャラクターである。
- 16) ウルトラマンをデザインした成田亨は、ウルトラマンの口はアルカイクスマイルを念頭においてデザインしたと言う。従って、少なくとも、初代マンの姿には〈神〉が意識されていた言えよう。
- 17) ただし、〈女神〉のような〈神様〉キャラクターは、「あなた」という対称詞を使えるかもしれない。
- 18) 他に〈神様〉が用いることができない表現として、「ごめんなさい」や「すみません」のような明示的な謝罪表現がある。(1)にあるように、ウルトラマンはハヤタ隊員に対して「申し訳ないことをした」と述べているが、明示的な謝罪表現は用いていない。〈神様〉キャラクターにとっては、謝罪すること自体がそのキャラクターを崩壊させる可能性の高い行為であるが、ここでウルトラマンは、明示的な謝罪表現を用いないことで、かろうじて〈神様〉キャラクターを保っていると言える。
- 19) 渡辺（1994）によれば、イントネーションには、「文法機能」「心的態度機能」「談話機能」「スタイル機能」の4つがある。
- 20) 平坦調のイントネーションをもつ発話は、〈宇宙人〉キャラクターまたは〈ロボット〉キャラクターの役割語の特徴でもある。宇宙人の「ワレワレハウチュウジンダ」や、ロボットの「ワタシハロボットデス」のような発話を想起されたい。
- 21) 鈴木（1994）は、ウルトラマンの声を再現する過程で、次のように述べている。

ウルトラマンは人間と違い金属質のもので顔が形成されているので声にエコーがかかってくる。しかも金属は人間の肉とは違ってもとの声の高い周波数から低い周波数までそのまま反射するので、口の内側を通る際に、もとの声よりもやや低い声として反射されて、口から出る時は、実際よりもやや低く聞こえる人間とは、その音が違ってくるのである。
- 22) 『ウルトラマンA』以降、ウルトラマンの声に伴う残響音の大きさにも衰退が見られる。『ウルトラマン』第1話および第39話の初代マンの声や、『ウルトラセブン』第48話のセブン上司の声に比べて、『ウルトラマンA』第13話のウルトラ兄弟のそれは、明らかに、残響音の持続時間が短い。
- 23) 『ウルトラマンA』第13話には、「兄」の初代マンが、「弟」のエースをいさめるために、頬を平手打ちするという、至極「人間」的なシーンがある。
- 24) ウルトラ兄弟が〈神様〉キャラクターを降りたことによって、代わりに〈神様〉キャラクターを演じる役目を果たすのが、『ウルトラマンA』で登場するウルトラの父、『ウルトラマンタロウ』で登場するウルトラの母、『ウルトラマンレオ』で登場するウルトラマンキングである。彼らは、〈神様〉キャラクターの役割語で話す。また、2009年公開の映画『大怪獣バトル ウルトラ銀河伝説 THE MOVIE』に初登場したウルトラマンゼロはセブンの息子という設定であるが、ゼロの言葉づかいは、〈神様〉キャラクターの役割語からまったく逸脱している。いわゆる平成ウルトラマンの言葉づかいについての考察は別の機会に譲る。

## 資料

相原一士・富田智子・江尻潔 編集（2007）『怪獣と美術 - 成田亨の造形芸術とその後の怪獣美術 -』東京新聞  
ウルトラマン解体新書編集委員会（1994）『ウルトラマン解体新書』永岡書店  
グループ「K-76」編（1992）『ウルトラマン新研究 - その「戦争と平和」論概説』朝日ソノラマ  
講談社 編（2006）『テレビマガジン特別編集スペシャル 講談社ヒットブックス ウルトラマン』講談社  
講談社 編（2008）『テレビマガジン特別編集スペシャル 講談社ヒットブックス ウルトラセブン』講談社  
SUPER STRINGS サーフライダー 21・編（1991）『ウルトラマン研究序説』中経出版  
竹内博 編（1998）『ウルトラセブナルバム』朝日ソノラマ  
竹内博 編（2003）『帰ってきたウルトラマンアルバム』朝日ソノラマ

DVD『ウルトラマン』1～10巻 円谷プロダクション  
DVD『ウルトラセブン』1～12巻 円谷プロダクション  
DVD『帰ってきたウルトラマン』1～13巻 円谷プロダクション  
DVD『ウルトラマンA』1～13巻 円谷プロダクション  
DVD『ウルトラマンタロウ』1～13巻 円谷プロダクション  
DVD『ウルトラマンレオ』1～13巻 円谷プロダクション

## 参考文献

- 井上史雄 (2000) 『日本語の値段』大修館書店
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏 編 (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版
- 金水敏 編 (2011) 『役割語研究の展開』くろしお出版
- 国立国語研究所 (1996) 『学校の中の敬語』平成 8 年度国立国語研究所公開発表会資料
- 定延利之 (2005) 『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化』岩波書店
- 定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラクター」『文学』7-6, p.126-133
- 定延利之 (2008) 『煩惱の文法—体験を語りたがる人々の欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』筑摩書房
- 定延利之 (2011) 『日本語社会 のぞきキャラくり—顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
- 真田真治 (1991) 『標準語はいかに成立したか—近代日本語発展の歴史』創拓社
- 鈴木松美 (1994) 「ウルトラマンとウルトラセブンの“真実の声”とは？」ウルトラマン解体新書編集委員会『ウルトラマン解体新書』p.120-129
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店
- Trudgill, Peter (2003). *A glossary of sociolinguistics*. Edinburgh University Press.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 本田由紀 (2011) 『若者の気分 学校の「空気」』岩波書店
- 渡辺和幸 (1994) 『英語イントネーション論』研究社出版